

句集 世紀末の小町

大西泰世



立松和平氏

ページを繰っていくうち、私は絶句した。傑作の前に不用意に立ってしまったという感があった。

現身へほろりと溶ける沈丁花

何という言語感覚であろうか。この沈丁花とは作者の
ことのようにもあり、〈私〉を超えた遙かに大きなものの
ようでもある。この世のものではなかった沈丁花が、ほ
ろりと境界線を超え、現身になる。